「一橋ビジネスレビュー」の今

研究・イノベーション学会「大学経営研究懇談会」
2023/2/3

一橋大学 イノベーション研究センター

吉岡(小林)徹 t-koba@iir.hit-u.ac.jp

今日の内容

- 一橋ビジネスレビューの昔
- 一橋ビジネスレビューの今
- 理想論
- 悩み

- ※ここでお話する内容は、一編集委員としての個人の見解です。

一橋ビジネスレビューの昔

HITOTSUBASHI UNIVERSITY

1944年
東京商科大学
産業能率研究所
発足

1949年
一橋大学
産業経営研究所

1953年
『ビジネスレビュー』
創刊

2000年
『一橋ビジネスレビュー』創刊

東洋経済新報社との連携で創刊。「理論と実践をつなぐ唯一の架け橋として21世紀の経営学をリードする」ことを目指し、当初は企画体制は日本の代表的な研究者とすることが意識されていた

（画像出所）東洋経済新報社

一橋ビジネスレビューの今：雑誌の概要

- 季刊 ￥2,200
- 特集記事5～7本
  - 研究者の研究紹介、実務家の解説
- 連載1～2本
  - 研究者の研究レビュー
- インタビュー記事1本
- ケーススタディ1～2本
- 査読付き論文0～稀に1本

（画像出所）東洋経済新報社

一橋ビジネスレビューの今：記事の例

[特集]

デザインとは何か？
経営とイノベーションの本質に迫る

REVISITING "DESIGN" AS AN ESSENTIAL CONCEPT OF BUSINESS MANAGEMENT

CONTENTS | 2022 WIN. 70巻3号

4 特集にあたって …… 吉岡（小林）徹

[特集論文—I]
10 デザインの本質 …… 永井一史
石器時代と「デザイン経営」をつなぐもの

[特集論文—II]
22 デザインの垣根 …… 山中俊治
今と昔

[特集論文—III]
32 網膜のデザインと観念のデザイン …… 森永泰史
私論「デザイン経営の読み解き方」

[特集論文—IV]
44 プロダクトデザイナーから見たデザイン …… 柴田文江

[特集論文—V]
52 行政におけるデザイン思考の活用 …… 外山雅暁
特許庁「デザイン経営」の取り組みより

[特集論文—VI]
62 製造業におけるサービスデザインとマネジメント …… 木見田康治

[特集論文—VII]
72 デザインの普及と進化するマーケティング …… 古江奈々美

[連載] エフェクチュエーションによる新市場創造　第3回
「起業家による機会の認識」を通じた市場機会の創造 …… 吉田満梨 86

[連載] イノベーションマネジメントの定石　第8回
知的財産権マネジメント …… 吉岡（小林）徹 96
イノベーションの盾と矛

[連載] 産業変革の起業家たち　第13回
衛星打ち上げで終わらない宇宙開発への尽きない思い …… 八坂哲雄 106
株式会社QPS研究所 ファウンダー
〈インタビュアー〉青島矢一／藤原雅俊

[ビジネス・ケース]
[No.183] 旭酒造 …… 南 敦 114
「脱」杜氏の酒造りと「獺祭」の海外展開
木島絵里子
内田翔太郎
佐藤栄二
澤村慎太郎
森 一晃
青島矢一

[No.184] アールシーコア …… 秋池 篤 128
個性的な「暮らし」を届けるBESSの家
吉岡（小林）徹
村山貴俊

[マネジメント・フォーラム]
デザインはより良い世界をつくるためのムーブメント …… 田中一雄 144
株式会社GKデザイン機構 代表取締役社長CEO
〈インタビュアー〉米倉誠一郎／吉岡（小林）徹

[私のこの一冊]
小さな勇気の灯を胸に …… 酒井 健 105
江川紹子『勇気ってなんだろう』

ビジネス・ケース　オンデマンド販売のご案内 141
ビジネス・ケース　バックナンバー一覧 142
本誌バックナンバー紹介 156
次号予告・定期購読のご案内 158

2023.01.30 00:38:35 一橋大学

2023.01.30 00:38:35 一橋大学

（画像出所）東洋経済新報社

一橋ビジネスレビューの今：企画・編集体制

- 企画
  - 編集長（米倉誠一郎教授）＋一橋大学イノベーション研究センター所属教員（9名）＋同経営管理研究科のイノベーション系研究者数名が中心
  - 東洋経済新報社の担当編集者が加わる
- ロジ
  - 執筆者対応：同センターの助手
  - 編集・校正：東洋経済新報社

（画像出所）米倉誠一郎Webサイト、一橋大学イノベーション研究センター

一橋ビジネスレビューの今：経営学内の傾向と一橋ビジネスレビューの位置づけ

私見

- 理論重視
- 実証重視
- 記述重視

×

- 定性
- 定量

×

- 実務への貢献
- 学術への貢献

とくに実証研究では論文単位の実務への貢献が小さくなる

企画メンバーの志向

- （理論重視・実証重視）×（定性・定量）×（学術への貢献）

ビジネスレビューとして好まれるのは

- （記述重視・理論重視・実証重視）×（定性・定量）×（実務への貢献）

理想像:ターゲット層と顧客価値

- ターゲット層
  - 経営者、役員、上級管理職層（約500万人:国勢調査）
  - 実質:…のうち、潜在的なビジネススクール学生層(年代×学ぶ意欲→最大で100万人、実質は50万人くらいか？）
- 顧客価値
  - 経営の知的レベルの向上のうち、知識創造に関わる知的能力の支援
    - × 短期的な情報やノウハウ
  - 「読者に3カ月をかけて一冊の論文集をじっくりと読みこなしてほしい」

（画像出所：Flaticon）

理想像:書き手としての大学研究者への価値

悩み① 理念に沿った記事を書ける人が限られている

- 筋が通っていて、しかも普遍性の高い話を1.5万字書くことは簡単ではない
- 研究者でもそもそも論文を書ける人が限られている
  - ごく僅かな人が多数の論文、書籍を創出（Lotkaの法則）
  - しかも実務家にもわかりやすく書ける人は限られている
- 実務家も同様に限られている
  - 霞が関の「ポンチ絵」文化、企業の「1頁要約、箇条書き」文化の影響？
- ビジネス誌として出そうとすると、企画時点での調整、手直しが必要になることがある

プロの編集者のおかげで、品質の管理ができていることが一橋ビジネスレビューの良い点

悩み② 大学に対する規範的要請、政策的要請

- 若手に査読付き論文重視の文化が浸透しつつある
  - …といっても経営学では、
    教員枠の空き（＝定年）＞優秀な博士課程修了生
    という印象
  - おそらく単純なランキング志向、序列志向が動機ではない
- 肌感覚での若手の査読付き論文重視の動機
  - 「海外の研究が活発化し、緻密な研究が積み重なっている中、キャッチアップをするためにも世界の目に触れられる成果を出したほうがよい」

一方で、質の高い海外英文査読付き論文を出そうとすると、実務向けの貢献をする時間は減る

悩み② 大学に対する規範的要請、政策的要請 ～一橋個別の事情～

- 大学が指定国立大学法人になった（2019～）
  - 全学レベルでは英文査読付き論文数が重視
  - 英文査読付き論文×被引用数に給与インセンティブ付与（2021～）
- 部局がビジネススクールとしての国際認証を受けるようになった（2021～）
  - 部局レベルでも英文査読付き論文数が重視（ただし、5年に1本、かつ、高い質は問わない）

総論としての悩み：社会科学分野での特定大学の学術誌の立ち位置の難しさ

- 研究成果のアウトリーチならば
  - 書籍のほうが規範的に重視される
    （→ただし書籍の執筆は論文以上に大変。その中間として機能か？）
- 大胆な研究成果の公開の場ならば
  - 海外の査読付き論文でも通りうる（通らないというのは、論理性とacademic writingのスキル不足）
  - どうしても難しければプレプリントサーバー（SSRNなど）で十分
- 若手の育成の場ならば
  - 国内学術誌がその役割をすでに担っている
  - 海外学術誌・学会のほうが熱心である分野も（経営学はそう）

総論としての悩み:限られた資源をどう配分するか？

- 「時間」は最大の資源
- 投下した資源に対して得られる成果(return on investment)は強く意識するべき
- 徐々に事業の存続が苦しくなる
  →手を広げる
  →忙しいので質が下がる
  →当該事業の存続が更に苦しくなる
  →…
  という悪循環になりがちではないか？